

お手紙（アーノルド・ローベル）

一 作者と作品について

作者のアーノルド・ローベル (Arnold Lobel) は、一九三三年ロサンゼルスに生まれ、一九八七年ニューヨークで没したアメリカの絵本作家である。一九七三年「ふたりはいっしょ」でニューベリー賞、一九八一年「どうぶつものがたり」でカルデゴット賞を受賞した、二〇世紀アメリカを代表する絵本作家の巨匠である。一部の作品は日本の国語の教科書に採用されている。ローベルのよさは、幼い読者を対象としながらも、その作品が楽天的で明るい展開のワン・パターンに陥ることなく、時には悲しみ、嫉妬、風刺、ユーモアなどを交えて人間の幸福とは何かということを追究しているところにあると評価されている。しかし、それだけで作品にはいつもローベル一流のヒューマンな感情が流れている。絵のタッチも独特で、軽く書き流しているように書いて実に細部まで計算され、しかもユーモアに溢れているのは素晴らしいの一言に尽きる。ローベルの絵本の多くが、芥川賞を受賞した詩人・作家の三木卓氏によって訳された。

訳者の三木卓（みきたく）は、一九三五年五月一三日生まれ。日本の小説家、詩人、翻訳家。日本芸術院会員。本名、富田三樹。東京市生まれ、満洲大連市、静岡県静岡市育ち。早稲田大学第一文学部露文科卒。在学中に「現代詩の会」結成に参加するなど詩人として出発。

大橋 実華、鄧 立新

卒業後、日本読書新聞、河出書房新社などで働くかたわら詩、創作を発表。

英米、ロシアの児童文学の翻訳は数多く、特にアーノルド・ローベルのシリーズはロングセラーとなっている。三木文学の特徴は生々しい人物や自然描写にある（「かれらが走りぬけた日」など）。異性に固執する点は谷崎潤一郎に通じるが、谷崎と違ってその視線の背後には死が滞在している。

二 叙述について

つまり、お手紙をまつじかんなんだ。

「つまり」は、これ以上進めない（詰まった）地点、最終的な到達点、というのが本来の意味である。「つまり…」という話を聞いたら、聞いた方はその時点で「なるほどね」と納得できて、理解が完結しなければならぬ。「つまり」は、単に前に述べた事柄を言い換えるような場合から、ある一つの論理展開を終結させる結論を導くような場合まで、広い範囲で用いられる。ここでは、前文の「一日のかないしい時」



を「お手紙をまつ時間」であると言い換えている。

「結局」や「要するに」は、ふつう、前に述べた事柄をまとめ、結論を導く際に用いられ、単に言葉を言い換える場合には用いられない。

「手紙」とは、用事などを記して、他人に送る文書のことである。

「だって、ぼく、お手紙もらったことないんだもの。」

本来なら、この一文は、「ぼくは、お手紙をもらったことがないんだ。」となるのが普通である。しかし、助詞「を」の省略や「だって」「もの」に少し幼さが残り、かえるくんが甘えているがまくんの姿が考えられる。

「だって」は、助詞「だって」が接続詞化したものである。相手の言葉に反対したり、相手の反対を予想したりして、そうなった事情を説明する時に用いる言葉である。ここでは、前の段落の「ふしあわせな気もち」になる理由を述べるために使われている。

「ぼく」とは、がまくんのことである。

「いちどもかい。」

「かい」は、「かい」という終助詞（終助詞か＋終助詞い）文末にくる種々の語に付く。（親しみをもって）疑問・反問・確かめの意を表す。ここで、かえるくんががまくんが親しい関係であることがわかる。

「だれも、ぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。」

「なんか」は、望ましくないもの、価値の低いものとしてあげる意味で使われることが多い。しかし、ここでは「くなどの貴重なもの」の意味として使われているだろう。がまくんは、普段そのような貴重

なものをもろう経験がなく、すねているような口調であるということが考えられる。

かえるくんは家から飛び出しました。

「飛び出す」とは、勢いよく外や前へ出るの意を表す。前の段落の「大急ぎで家へ帰りました」と呼応して、かえるくんのがまくんに早く手紙を届けたいという気持ちが伝わる。また、かえるくんの動作であるということから、かえるが飛ぶ（うしろ足で蹴り上げる）ような動作も想像できる。

「きみ、おきてき、お手紙が来るのを、もうちょっとまってみたらいいと思うな。」

「さ」は、助詞であり、相手を慰める気持ちで軽く言い放つ時に使う。

「思うな」と言ったのは、今は本当のことが言えないからである。また、他人事のように言ったのは、かえるくんががまくんにお手紙を書いた送ったことがわからないようにするためだと考えられる。

「ぼく、もうまっているの、あきあきしたよ。」

「あきあき」とは、十分すぎたり、くどかったりして、すっかり嫌になること。うんざりすることである。ここで、うんざりや飽きるなどの同義語を使わず、「あきあき」を使うことにより、がまくんは、お手紙を待つことが、もうすっかり嫌になっている印象を与える。

かたつむりくんは、まだやってきません。

今までは、毎日お手紙を待っているのは、がまくんであったが、手紙を待つのが、がまくんからかえるくんに変わった。

本文中に、「かたつむりくんは、まだやってきません。」という文が三回出てくるが、その場の状況、かえるくんの気持ちは同じではない。五一頁七行目の前文では、窓から郵便受けを見ていたかえるくんが、五二頁五行目の前文では、窓からのぞくようになり、手紙を待ちわびる気持ちいだんだん強まっている。挿絵などからも、かえるくんがお手紙を待ちわびる様子がよく伝わり、かえるくんの、手紙を早く届けてほしいという気持ちが次第に募っていると考える。

「まだ」とあるが、副詞の「まだ」は（打消しの語を伴って）ある事柄がその時点までに実現していないさまを表す。

「やって来る」は、来ている途中の動作であり、だんだんと近づいてくる様子である。しかし、ここでは、「まだやってきません」とあるので、かたつむりくんが来る気配もなく、がまくんの家に着くのは時間がかかりそうであることがわかる。かえるくんの待ち遠しい、焦る感じ、早く手紙が来てほしいという気持ちが感じられる。

かえるくんは、まどからのぞきました。

「のぞく」とは、相手に気づかれないように物陰から見たり、隙間を通して見たりする、高いところから身を乗り出して見るという意味である。「みる」は、目で見る、観察するという意味であり、「のぞく」とは少し動作が違うように思う。

ここでの、「のぞく」は、身を乗り出して見るという意味だと考えられる。お手紙を待つかえるくんが、初めは窓から郵便受けを見ているだけだったのに、窓からのぞくようになったことから、手紙が届くの

を待ちわびている気持ちがわかる。

「ばからしいこと言うなよ。」

「ばからしい」とあり、ばかばかしいと同じ意味で、無意味でくだらなく見えるさま。ここでは、「誰かが自分に、お手紙をくれること」が考えられないほど馬鹿らしいこと・ありえないことだと思っていると考える。普通は、手紙を待つことが絶対ばからしいこととは言えないので、ここでの用法から、がまくんの失望感やかえるくんの言葉を信じていないことがわかる。

「でも、来やしないよ。」

「や」とあり、「や」という接続助詞は強調表現で、来る可能性は全然ない、来ることは絶対ないという意味である。（例・赤ちゃんはリングを食べやしないよ。）がまくんは手紙が絶対来ないと確信していて、失望した気持ちがわかる。

二人とも、とてもしあわせな気持ちで、そこにすわっていました。

「しあわせ」とは、嬉しいよりも上で、他の人ができないことができた、運がついている時の感情である。「嬉しい」は、一瞬であるが、「幸せ」は、しみじみと感じるものである。

「二人とも」があることで、互いに幸せであるという気持ちがわかる。しかし、二人が感じている「幸せ」は同じなのか。ここでは、がまくんは、手紙を待つ喜びだけでなく、かえるくんがわざわざ手紙を書いてくれたこと、自分のことを大切に思ってくれていることに幸せを感じている。かえるくんは、がまくんが幸せな気持ちになったこと

で、自分も幸せを感じているのだと考えられる。

座って待っていることから、落ち着いている様子がわかる。

四日たって、かたつむりくんが、がまくんの家につきました。

「まかせてくれよ。」「すぐやるぜ。」と頼もしく言ったかたつむりくんだが、一生懸命がんばったのに四日もかかてしまった。しかし、このユーモラスなところは、ゆったりとした広がりを感じさせる。普通、手紙を届けるのに四日も時間がかかるのは、距離が遠いことが考えられる。しかし、かえるくんがまくんの家はそんなに遠くないので、ここでは、かたつむりくんが歩くのが遅い生き物であることがわかる。

三 考察

本作品は、「ふたりはともだち」という絵本のなかに収録されている物語の一つである。一連の作品は、「はるがきた」〈おはなし〉〈なくしたボタン〉〈すいせい〉〈おてがみ〉である。どの作品も、正反対の性格のかえるくんがまくんがおりなす友情の物語として、描かれている。

「お手紙」は、二人の登場人物の行動の中心に、場所や時間の移り変わりがはっきり描かれている。「○○が言いました。」を除くと、ほとんどは、会話文でつづられている。訳者の意図もあってか、かなり古風な言い回しが多い。また、語尾（終助辞）も「よ」「さ」「ぜ」などが使われ、話し手の気持ちを読みとる手がかりとなると考えられる。

また、「お手紙」は、友達の不幸せと一緒に悲しみ、幸せを共に喜ぶ、ほのぼのとした心情を描いた作品である。特別な事件が起こるわけでもなく、四日遅れの、しかも内容のわかっている「お手紙」を仲良く

待つ二人の様子が描かれている。

この物語の面白さの一つは、かたつむりくんが手紙を託した点である。「すぐやるぜ」と言っておきながら「四日たって」やっと届くという点がユーモアを生んでいる。「中心人物と対人物」の人物設定よりも、「脇役」の人物設定の方が、重要な意味を持っているかもしれない。「かたつむり」の代わりに「うさぎ」ではダメである。かたつむりくんは、歩くのが遅い生き物なので、手紙が届けられる時間が長かった。かえるくんは、かたつむりくんに頼んだことを後悔しなかったのか、かたつむりくんに頼んだら時間がかかり遅くなるということがわからなかったのか疑問である。しかし、そのおかげで、お手紙を待つ間に、がまくんとかたつむりくんが深く話すことができ、より友情が深まったのではないだろうか。また、手紙の内容を言葉で直接言ったことにより、幸せの感情が高まる効果となったのかもしれない。そして、かえるくんは、大急ぎで手紙を書いたが、かたつむりくんが手紙を託したのは、手紙をもらうがまくんの嬉しい顔を見たいから、がまくんの家と一緒に待たためだったのではないかと考える。

